

本学学部生の地域活動参加への意識に関する考察

—実施者と非実施者の比較—

大内 義昭

1. はじめに

青少年問題審議会は、1979年の「青少年と社会参加」に関する具申のなかで、青少年期における最も重要な発達課題を自己の確立として位置づけ、青少年がその成長段階に応じてコミュニティの形成に参加することは、社会性や連帯性を体得するために有意義であると、述べている¹⁾。そして、青少年が自主的選択によって地域社会づくりに参加することは、青少年の自己実現と成長のためにも、また、成熟した民社会の形成のためにも、不可欠であると言及している。

一方、わが国の産業・技術革新をはじめとする都市化などの急速な社会の変化は、国民に便利で豊かな消費生活をもたらす反面、地域に住む人々の連帯意識を弱体化させているともいわれている。特に、次代を担う青少年の意識において、個人志向が進行し、人間関係の希薄化や地域社会への関心が薄れているとの指摘²⁾は、少子高齢社会を迎えた今日、大変由々しき問題であると思われる。

また、このような地域社会における人間関係の希薄化進むなか、2002年、中央教育審議会は「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」の答申をまとめ、青少年の時期には学校内外における多様な体験活動の機会を充実し、豊かな人間性や社会性などを培うことが必要との認識のもと、学校、家庭、地域が連携・協力して社会的な仕組み等をおこなうべきとの提言³⁾がなされた。

したがって、大学生を対象とした地域活動(ボランティアを含む)参加への意識を調査し、個人的要因や地域との関連を明らかにすることは、社会参加を通して自己の確立を獲得していく学生にとっても、また、崩壊しつつある地域を活性化する上でも大変意義のあることと思われる。

本研究の目的は、本学学部生の地域活動参加における意識を個人的要因、および地域的要因の観点から捉え、実施者と非実施者を比較し、各要因との関連を統計的に明らかにしようとするものである。

なお本研究は、文部科学省「私立大学学術研究高度化推進事業」の「社会連携研究推進事業」の補助を受け、「連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究」の一環として、第3「地域・若者交流プロジェクト」が取り組んできた基礎調査をまとめたものである。

2. 調査の方法

2007年6月18日から6月30日にかけて、文学部生4,135名に対して質問紙調査を行い、回収率81.5%、有効回答率99.7%の数値を得た。主な調査項目は、過去1年間の地域活動(ボランティアを含む)の実施状況、大学生生活の満足度、過去の参加における快・不快経験、活動参加に対するイメージ、活動参加を促進する要素・妨げとなる要素、個人の属性(所属学部、学年、部活動、アルバイトなど)からなっている。そして、収集したデータは単純集計の後、実施者・非実施者別に各質問項目のクロス集計を行い、 χ^2 検定を用いて有意差の検定・残差分析による検討を試みた。

なお、統計処理には、Excel 2000とSPSS 10.0J for Windowsを用いた。

3. 結果

1) 基礎調査項目の概要

サンプルの特性

調査分析の対象となった人文学部学生3,363名の所属学科別内訳は、児童学科57.7%(N=1,938)、人間栄養・生活文化学科16.6%(N=558)、音楽文化学科6.5%(N=218)社会福祉学科5.8%(N=209)、心理・臨床学科5.8%(N=194)、日本文化学科3.9%(N=142)、英米・外国語学科1.4%(N=51)現代ビジネス学科1%(N=36)、生涯教育文化学科1%(N=17)であった。

また、所属コースにおける必修免許・資格のほかにも単位を取得していると答えた学生は63.6%(N=2,021)、学内の部活動やサークル活動に参加していると答えた学生は

18.1% (N=602), 定期的にアルバイトを実施していると答えた学生は49.6% (N=1,643)であった。

この1年間の地域活動参加状況

本研究では、過去1年間における地域活動(ボランティアを含む)への参加の有無について質問したところ、28.3% (N=932)の学生が参加したとの回答を得た。

① 実施者における過去1年間の活動種目

図1は、過去1年間の地域活動における実施種目の度数を表したものである(複数回答)。なお、図2は「今後参加

してみたい地域活動」の度数を表したものである(複数回答)。

② 大学生活における満足度

図3は、学部生の学校生活における満足度を示したものである。彼らの学校生活における概況は、授業や課題にわかれて生活にゆとりを感じられない中でも、友人や講義・カリキュラムに満足しており、夢や目標実現のために懸命に学んでいる様子が窺える。また、教師との人間関係や教え方、校則に対する評価は二分されていた。さらに、クラス内における存在感や部活・学校行事に積極的に参加して

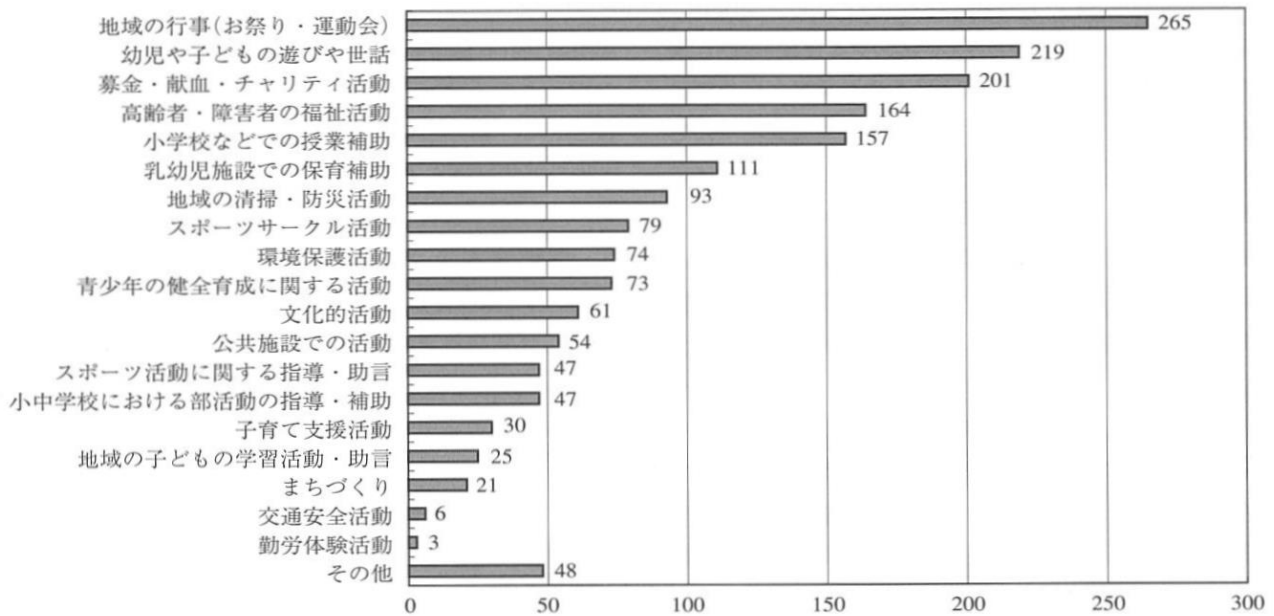


図1 過去1年間における地域活動参加状況

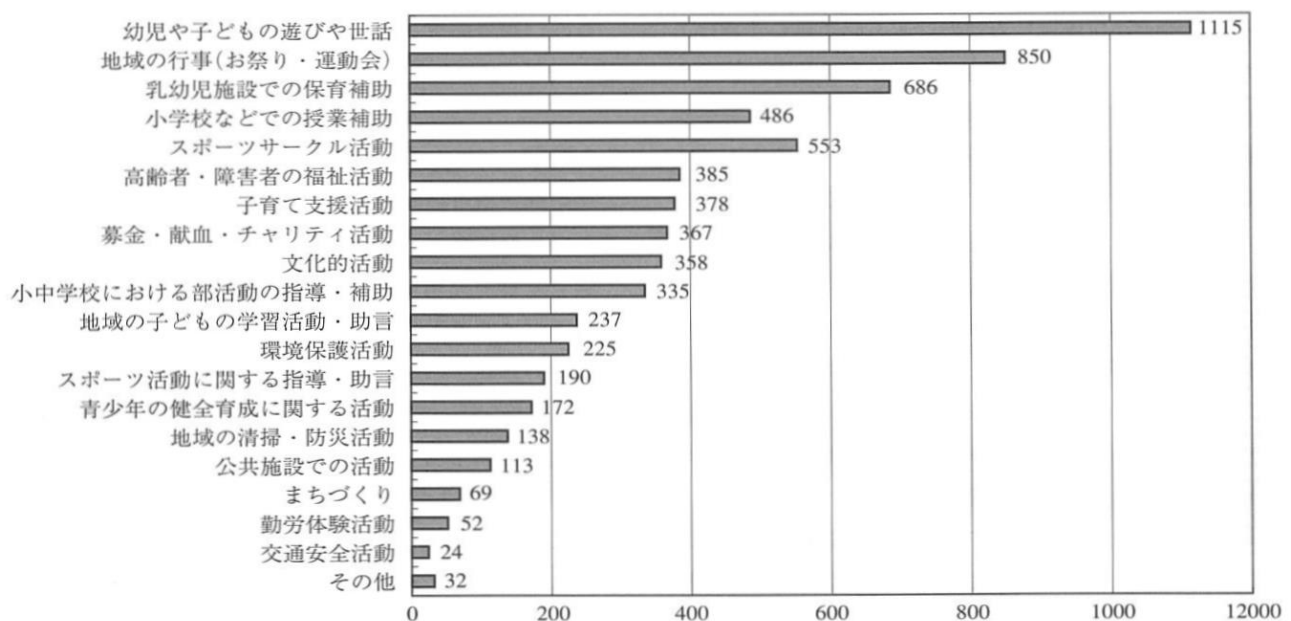


図2 参加してみたい地域活動

いる者は、40%に止まった。

③ 地域活動への参加が自身にあたえる影響

地域活動への参加が自身にあたえる影響という観点から9項目の質問をしたところ、図4が示すようにどの項目に対しても高い肯定的な回答率を得ている。

④ 地域活動への参加を促進する要素

図5は、参加を促進する要素としてあげた質問10項目の結果を示したものである。学部生は「活動を必修授業として扱う」という項目を除き、他の9項目すべてに対して参加を促進する条件と考えていた。

⑤ 地域活動への参加を妨げる要素

図6は、参加を妨げる要素としてあげた質問12項目の結果を示したものである。これによると過半数の学部生が参加を妨げる要因として、「学業・生活におけるゆとりのなさ」や、「活動に対する自信の欠如」などの6項目をあげた。また、「他の活動に熱中」、「活動に対する魅力の乏しさ」、

「参加への強要」、「コミュニケーションが苦手」を妨げ要因として回答した者は50%をやや下回った。一方、「活動に対する偽善視」や、「活動に価値を見出せない」と答えた者は20%に止まった。

⑥ 過去の地域活動参加時の快・不快体験

図7は、今までに地域活動へ参加した経験があると答えた1,827名(55.7%)の学部生に対して、活動を通して感じられた快・不快体験の結果を示したものである。これによると、快体験の質問項目に対しておよそ8割の回答学生が肯定的に捉えており、不快体験ありと回答した学生は、「意見をうまく伝えることができなかった」を除くと他の項目では20%に満たなかった。

2) 地域活動実施者と非実施者との比較

ここでは、各基礎調査項目と、過去1年間の地域活動へ参加した実施群932名(28.3%)および参加しなかった非実

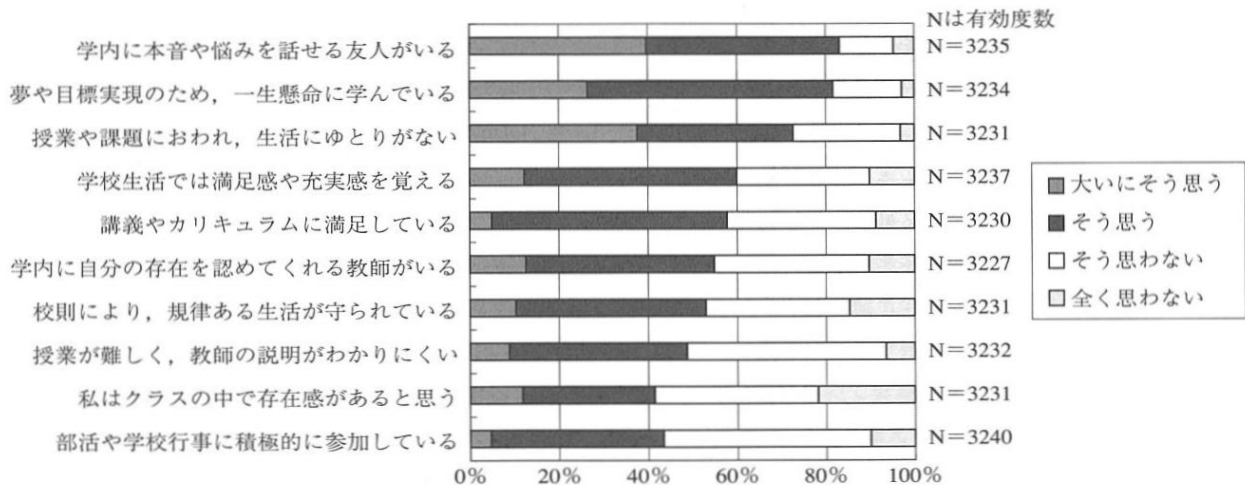


図3 大学生生活における満足度

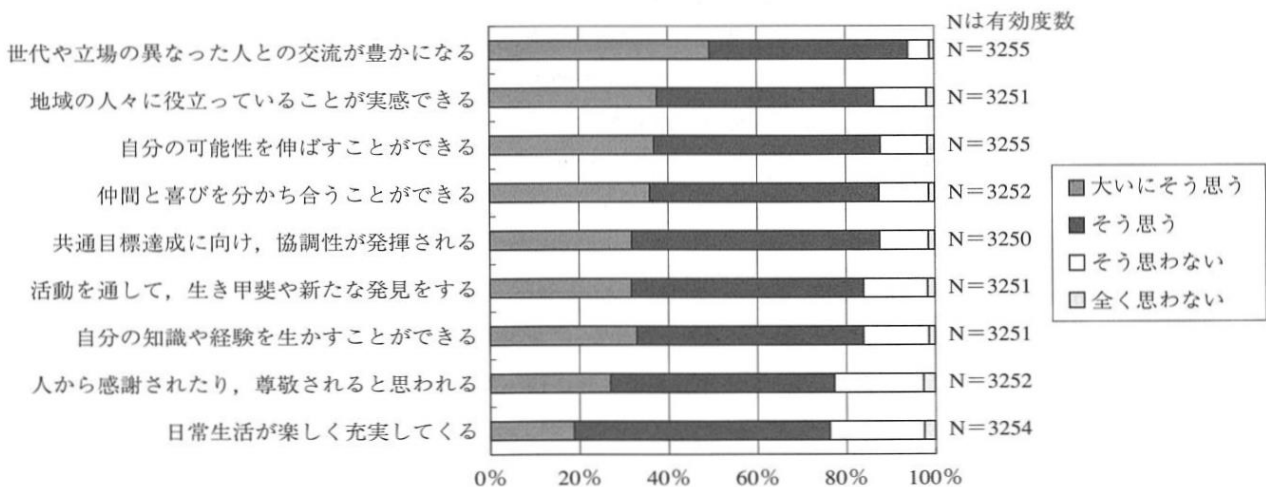


図4 地域活動への参加が自身にあたえる影響について

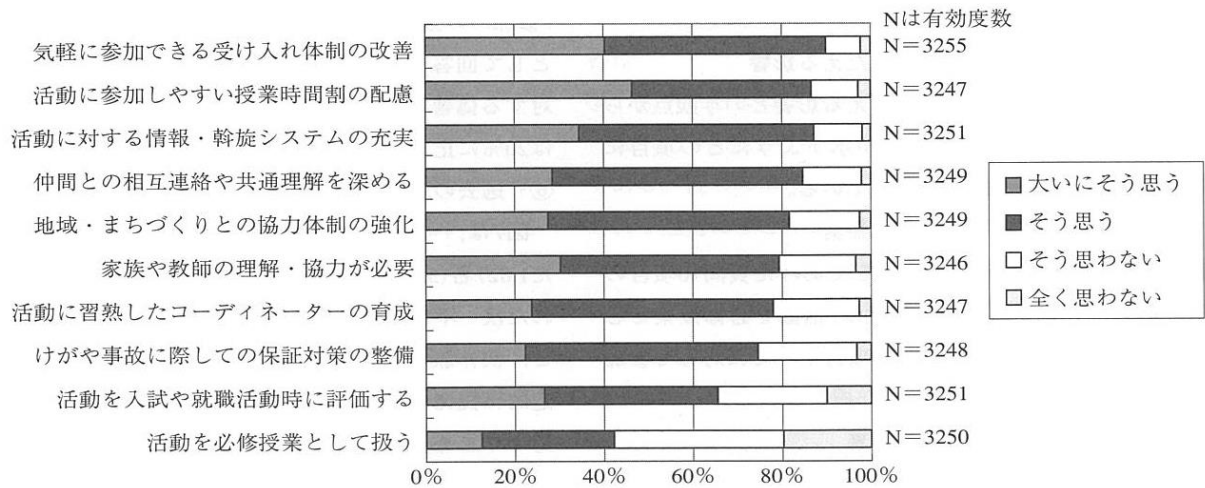


図5 地域活動への参加を促進する要素

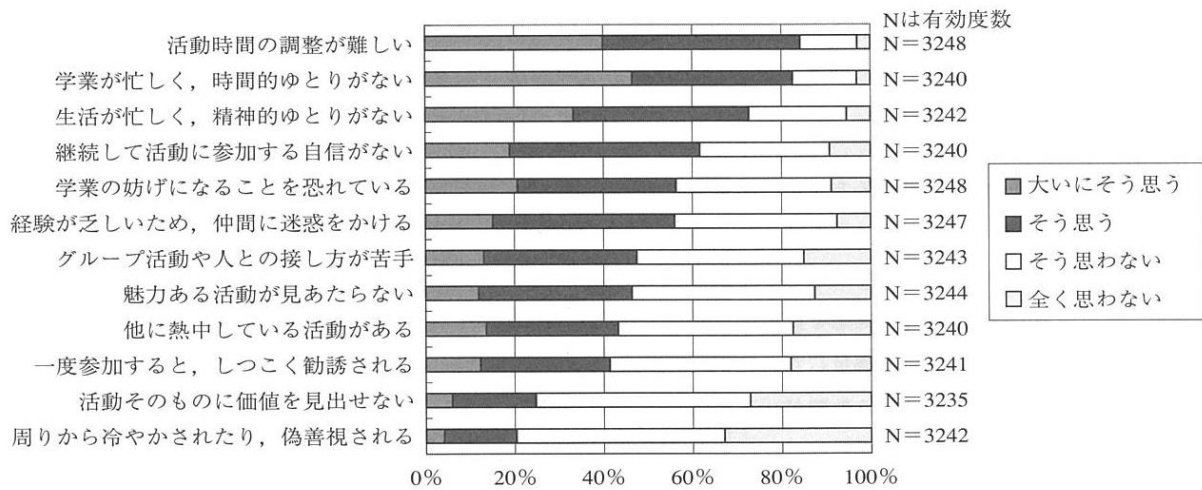


図6 地域活動への参加を妨げる要素

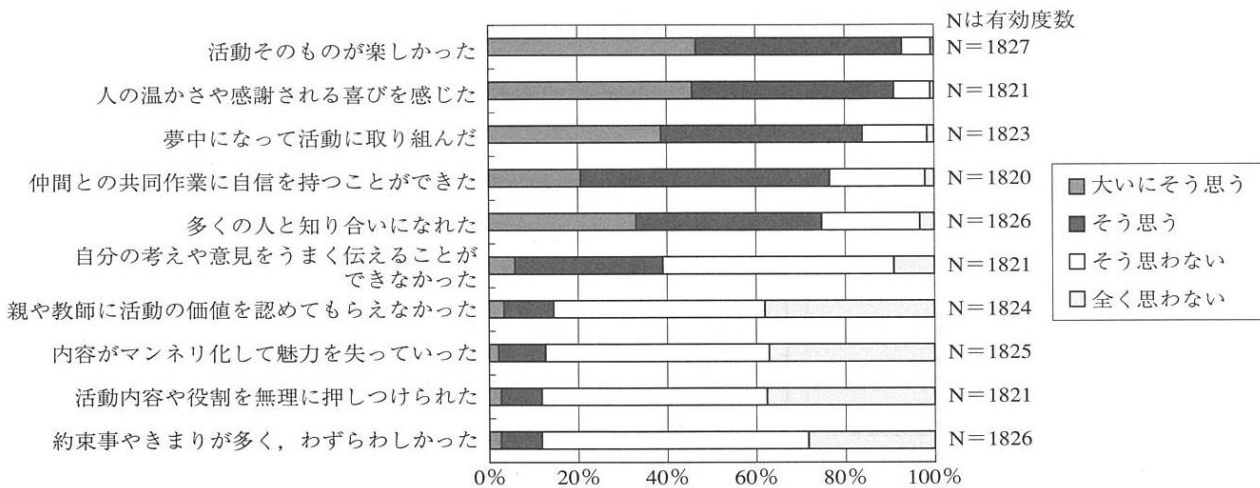


図7 過去の地域活動参加時の快・不快体験

施群2,359名(71.7%)の比較を試みることにした。統計手法としては、 χ^2 検定により有意差を求め、有意な結果を得

られた各質問項目に対して残差分析を用いて、有意性に貢献した段階を判定した。

①個人的な要因との関連

学内部活動など

表1は、部活動参加・未参加別に実施群と非実施群の人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意である($\chi^2(1)=57.19, p<.01$)。従って、実施群に部活動の参加者が多く見られ、非実施群には未参加者の多いことがわかった。また表2は、単位の取得別に実施群と非実施群の人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意である($\chi^2(1)=64.37, p<.01$)。従って、実施群に必修以外の単位を取得している者が多く見られ、非実施群には必修単位のみ取得する者が多いことがわかった。さらに表3は、アルバイトの有無別に実施群と非実施群の人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意傾向が認められた($\chi^2(1)=3.81, p<.10$)。従って、実施群にアルバイトをしている者が多く、非実施群にアルバイトをしていない者が多い傾向が見られた。

大学生生活満足度

表4は、各項目の満足度の段階別に実施群と非実施群の人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、有意であった9項目に残差分析をおこなった。なお、項目「授業や課題におわれ、生活にゆとりがない」は、有意差が認められなかったために表から省いた。

項目「悩みを話せる友人がいる」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=14.89, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「まあまあそう思う」の段階に非実施群が増えるということがわかった。

項目「目標実現のため、学んでいる」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=70.13, p<.01$)。

表1 実施群・非実施群と部活動参加との関連

	部活動参加者	未参加者	χ^2 値
実施群	240	683	$\chi^2=57.19^{**}$
非実施群	345	1997	

表2 実施群・非実施群と単位取得との関連

	必修以外取得	必修単位のみ	χ^2 値
実施群	661	228	$\chi^2=64.37^{**}$
非実施群	1315	913	

表3 実施群・非実施群とアルバイトとの関連

	アルバイト実施	実施なし	χ^2 値
実施群	476	437	$\chi^2=3.81$ (有意傾向)
非実施群	1125	1203	

そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「全くそう思わない」と「あまりそう思わない」の両段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「学校生活に満足感・充実感」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=32.81, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階において実施群が増え、「全くそう思わない」と「あまりそう思わない」の両段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「講義やカリキュラムに満足」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=13.08, p<.01$)。実施群に「大いにそう思う」と「まあまあそう思う」の両段階に実践群が増え、「全くそう思わない」段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「自分を認めてくれる教師がいる」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=18.57, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「あまりそう思わない」の段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「校則により規律ある生活が守られる」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=12.16, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「まあまあそう思う」の段階が増え、「全くそう思わない」の段階に非実施群が増えるということがわかった。

項目「教師の説明がわかりにくい(反転項目)」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=15.05, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階において実施群が増え、「あまりそう思わない」の段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「クラス内で存在感あり」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=15.48, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「まあまあそう思う」の段階において実施群が増え、「あまりそう思わない」の段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「部活・学校行事に積極的に参加」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=27.64, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」と「まあまあそう思う」の両段階に実施群が増え、「全くそう思わない」と「あまりそう思わない」の両段階に非実施群が増えることがわかった。

地域活動への参加が自身に与える影響

表5は、各質問項目の4段階別に実施群と非実施群の人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、有意であった全9項目に残差分析をおこなった。

項目「人との交流が豊かになる」は、 χ^2 検定の結果、人

表4 実施群・非実施群と大学生活満足度との関連

	大いに そう思う	まあまあ そう思う	あまりそう 思わない	全く 思わない
$\chi^2=14.89^{**}$				
「悩みを話せる友人がいる」				
実施群	408 (3.6 ^{**})	365 (-2.7 ^{**})	110 (-.02)	33 (-1.8)
非実施群	874 (-3.6 ^{**})	1043 (2.7 ^{**})	284 (0.2)	118 (1.8)
$\chi^2=70.13^{**}$				
「目標実現のため、学んでいる」				
実施群	322 (7.2 ^{**})	487 (-1.6)	94 (-5.2 ^{**})	14 (-2.9 ^{**})
非実施群	528 (-7.2 ^{**})	1302 (1.6)	408 (5.2 ^{**})	79 (2.9 ^{**})
$\chi^2=32.81^{**}$				
「学校生活に満足感・充実感」				
実施群	147 (4.3 ^{**})	460 (1.6)	243 (-2.6 ^{**})	66 (-3.4 ^{**})
非実施群	245 (-4.3 ^{**})	1093 (-1.6)	723 (2.6 ^{**})	260 (3.4 ^{**})
$\chi^2=13.08^{**}$				
「講義やカリキュラムに満足」				
実施群	59 (2.1 [*])	508 (2.0 [*])	287 (-1.7)	62 (-2.4 [*])
非実施群	107 (-2.1 [*])	1194 (-2.0 [*])	796 (1.7)	217 (2.4 [*])
$\chi^2=18.57^{**}$				
「自分を認めてくれる教師がいる」				
実施群	146 (4.0 ^{**})	388 (0.1)	287 (-2.6 ^{**})	91 (-0.4)
非実施群				
$\chi^2=12.16^{**}$				
「校則により規律ある生活が守られる」				
実施群	104 (1.2)	414 (1.9)	292 (0.4)	106 (-3.2 ^{**})
非実施群	229 (-1.2)	960 (-1.9)	757 (0.4)	369 (3.2 ^{**})
$\chi^2=15.05^{**}$				
「教師の説明がわかりにくい (反転項目)」				
実施群	76 (2.9 ^{**})	426 (1.2)	335 (-2.5 [*])	78 (-0.4)
非実施群	129 (-2.9 ^{**})	1021 (-1.2)	959 (2.5 [*])	209 (0.4)
$\chi^2=15.48^{**}$				
「クラス内で存在感あり」				
実施群	52 (1.8)	391 (3.1 ^{**})	387 (-3.1 ^{**})	83 (-1.1)
非実施群	97 (-1.8)	856 (-3.1 ^{**})	1124 (3.1 ^{**})	241 (1.1)
$\chi^2=27.64^{**}$				
「部活・学校行事に積極的に参加」				
実施群	140 (4.1 ^{**})	297 (2.2 [*])	310 (-2.2 [*])	170 (-2.9 ^{**})
非実施群	237 (-4.1 ^{**})	663 (-2.2 [*])	882 (2.2 [*])	541 (2.9 ^{**})

()内は残差 *p<.05, **p<.01

数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=129.41$, $p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「まあまあそう思う」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の各段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「人に役立っている実感」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=25.03$, $p<.01$)。そ

こで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「まあまあそう思う」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の各段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「可能性を伸ばすことができる」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=44.57$, $p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実

表5 実施群・非実施群と自身に与える影響との関連

	大いに そう思う	まあまあ そう思う	あまりそう 思わない	全く 思わない
$\chi^2=129.41^{**}$				
「人との交流が豊かになる」				
実施群	539 (6.5 ^{**})	346 (-5.1 ^{**})	31 (-2.5 [*])	6 (-1.5)
非実施群	1069 (-6.5 ^{**})	1107 (5.1 ^{**})	128 (2.5 [*])	29 (1.5)
$\chi^2=25.03^{**}$				
「人に役立っている実感」				
実施群	401 (4.4 ^{**})	423 (-2.1 [*])	89 (-2.4 [*])	8 (-2.4 [*])
非実施群	821 (-4.4 ^{**})	1164 (2.1 [*])	297 (2.4 [*])	48 (2.4 [*])
$\chi^2=44.57^{**}$				
「可能性を伸ばすことができる」				
実施群	454 (9.2 ^{**})	417 (-4.1 ^{**})	44 (-6.8 ^{**})	7 (-2.4 [*])
非実施群	748 (-9.2 ^{**})	1238 (4.1 ^{**})	301 (6.8 ^{**})	46 (2.4 [*])
$\chi^2=68.65^{**}$				
「仲間と喜びを分かち合える」				
実施群	410 (6.4 ^{**})	428 (-3.6 ^{**})	74 (-3.5 ^{**})	9 (-1.2)
非実施群	761 (-6.4 ^{**})	1247 (3.6 ^{**})	288 (3.5 ^{**})	35 (1.2)
$\chi^2=60.88^{**}$				
「協調性が発揮される」				
実施群	377 (7.0 ^{**})	473 (-3.1 ^{**})	62 (-4.8 ^{**})	8 (-1.7)
非実施群	660 (-7.0 ^{**})	1338 (3.11 ^{**})	293 (4.8 ^{**})	39 (1.7)
$\chi^2=95.71^{**}$				
「生き甲斐や新たな発見」				
実施群	397 (8.8 ^{**})	439 (-3.3 ^{**})	77 (-6.2 ^{**})	8 (-2.3 [*])
非実施群	633 (-8.8 ^{**})	1259 (3.3 ^{**})	391 (6.2 ^{**})	47 (2.3 [*])
$\chi^2=107.97^{**}$				
「知識や経験を生かすことができる」				
実施群	392 (7.4 ^{**})	434 (-2.7 ^{**})	89 (-5.2 ^{**})	6 (-2.2 [*])
非実施群	676 (-7.4 ^{**})	1222 (2.7 ^{**})	393 (5.2 ^{**})	39 (2.2 [*])
$\chi^2=16.55^{**}$				
「人から感謝されると思う」				
実施群	293 (4.0 ^{**})	438 (-2.0 [*])	163 (-2.0 [*])	25 (0.1)
非実施群	584 (-4.0 ^{**})	1201 (2.0 [*])	486 (2.0 [*])	62 (-0.1)
$\chi^2=129.41^{**}$				
「日常生活が楽しく充実する」				
実施群	280 (10.5 ^{**})	499 (-2.4 [*])	130 (-6.3 ^{**})	13 (-2.4 [*])
非実施群	334 (-10.5 ^{**})	1369 (2.4 [*])	562 (6.3 ^{**})	67 (2.4 [*])

()内は残差 *p<.05, **p<.01

実施群が増え、「まあまあそう思う」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の各段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「仲間と喜びを分かち合える」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=68.65, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「まあまあそう思う」と「あまりそう思わない」

の両段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「協調性が発揮される」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=60.88, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「まあまあそう思う」と「あまりそう思わない」の両段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「生き甲斐や新たな発見」は、 χ^2 検定の結果、人数

の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=95.71, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「まあまあそう思う」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の各段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「知識や経験を生かすことができる」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=107.97, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「まあまあそう思う」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の各段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「人から感謝されると思う」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=16.55, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階において実施群が増え、「まあまあそう思う」と「あまりそう思わない」の両段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「日常生活が楽しく充実する」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=129.41, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「まあまあそう思う」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の各段階に非実施群が増えることがわかった。

地域活動への参加を促進する要素

表6は、各質問項目の4段階別に実施群と非実施群の人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、有意であった全10項目に残差分析をおこなった。

項目「受け入れ体制の改善」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=63.97, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「まあまあそう思う」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の各段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「授業時間割への配慮」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=41.16, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「まあまあそう思う」と「あまりそう思わない」の両段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「情報・斡旋システムの充実」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=59.12, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「まあまあそう思う」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の各段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「仲間との共通理解」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏

りに有意性が認められた($\chi^2(3)=60.13, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「まあまあそう思う」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の各段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「地域・まちづくりとの協力」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=46.09, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」の両段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「家族や教師の理解が必要」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=35.36, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「まあまあそう思う」と「あまりそう思わない」の両段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「コーディネーターの育成」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=48.59, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「まあまあそう思う」、「あまりそう思わない」の両段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「保障対策の整備」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=9.68, p<.05$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階において実施群が増えていることがわかった。

項目「入試や就職活動時に評価」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=46.09, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」の両段階に非実施群が増えることがわかった。

項目「必修授業として扱う」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意傾向が認められた($\chi^2(3)=6.67, p<.10$)。残差分析をおこなったところ、「大いにそう思う」の段階において実施群が増えていることがわかった。

地域活動への参加を妨げる要素

表7は、各質問項目の4段階別に実施群と非実施群の人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、有意であった11項目に残差分析をおこなった。なお、項目「学業が忙しく、時間的ゆとりがない」は、有意差が認められなかったため表から省いた。

項目「活動時間の調整が困難」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=15.45, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に非実施群が増え、「全くそう思わない」の段階に実施群が増えていることがわかった。

表6 実施群・非実施群と参加を促進する要素との関連

	大いに そう思う	まあまあ そう思う	あまりそう 思わない	全く 思わない
$\chi^2=63.97^{**}$				
「受け入れ体制の改善」				
実施群	461 (7.4 ^{**})	401 (-4.3 ^{**})	46 (-3.8 ^{**})	9 (-3.1 ^{**})
非実施群	847 (-7.4 ^{**})	1216 (4.3 ^{**})	210 (3.8 ^{**})	65 (3.1 ^{**})
$\chi^2=41.16^{**}$				
「授業時間割への配慮」				
実施群	503 (6.2 ^{**})	323 (-3.6 ^{**})	70 (-3.3 ^{**})	19 (-1.7)
非実施群	1001 (-6.2 ^{**})	986 (3.6 ^{**})	271 (3.3 ^{**})	74 (1.7)
$\chi^2=59.12^{**}$				
「情報・斡旋システムの充実」				
実施群	400 (6.8 ^{**})	445 (-3.0 ^{**})	64 (-4.3 ^{**})	8 (-2.8 [*])
非実施群	723 (-6.8 ^{**})	1271 (3.0 ^{**})	285 (4.3 ^{**})	55 (2.8 [*])
$\chi^2=60.13^{**}$				
「仲間との共通理解」				
実施群	342 (7.1 ^{**})	477 (-3.0 ^{**})	86 (-4.0 ^{**})	10 (-2.6 ^{**})
非実施群	581 (-7.1 ^{**})	1352 (3.0 ^{**})	342 (4.0 ^{**})	59 (2.6 ^{**})
$\chi^2=46.09^{**}$				
「地域・まちづくりとの協力」				
実施群	318 (5.9 ^{**})	475 (-1.5)	107 (-4.1 ^{**})	14 (-2.4 [*])
非実施群	572 (-5.9 ^{**})	1283 (1.5)	410 (4.1 ^{**})	70 (2.4 [*])
$\chi^2=35.36^{**}$				
「家族や教師の理解が必要」				
実施群	345 (5.8 ^{**})	411 (-2.9 ^{**})	132 (-2.6 ^{**})	25 (-1.4)
非実施群	638 (-5.8 ^{**})	1181 (2.9 ^{**})	426 (2.6 ^{**})	88 (1.4)
$\chi^2=48.59^{**}$				
「コーディネーターの育成」				
実施群	290 (6.8 ^{**})	451 (-3.6 ^{**})	157 (-2.0 [*])	17 (-1.9)
非実施群	475 (-6.8 ^{**})	1312 (3.6 ^{**})	473 (2.0 [*])	72 (1.9)
$\chi^2=9.67^*$				
「保障対策の整備」				
実施群	233 (2.8 ^{**})	463 (-1.2)	196 (-0.7)	23 (-1.6)
非実施群	488 (-2.8 ^{**})	1235 (1.2)	525 (0.7)	85 (1.6)
有意傾向				
「必修授業として扱う」				
実施群	135 (2.6 ^{**})	267 (-0.6)	340 (-0.6)	174 (-0.7)
非実施群	267 (-2.6 ^{**})	704 (0.6)	893 (0.6)	470 (0.7)

()内は残差 *p<.05, **p<.01

項目「精神的ゆとりがない」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=37.60, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に非実施群が増え、「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」の両段階に実施群が増えていることがわかった。

項目「継続参加に自信がない」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=111.42, p<.01$)。

そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」と「まあまあそう思う」の両段階において非実施群が増え、「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」の両段階に実施群が増えていることがわかった。

項目「学業妨げへの恐れ」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=22.96, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」と「まあまあそう

表7 実施群・非実施群と参加を妨げる要素との関連

	大いに そう思う	まあまあ そう思う	あまりそう 思わない	全く 思わない
「活動時間の調整が困難」	$\chi^2=15.45^{**}$			
実施群	339 (-2.2*)	407 (0.0)	129 (1.5)	41 (3.3**)
非実施群	961 (2.2*)	1035 (0.0)	282 (-1.5)	54 (-3.3**)
「精神的ゆとりがない」	$\chi^2=37.60^{**}$			
実施群	257 (-3.9**)	348 (-0.9)	234 (3.1**)	74 (4.5**)
非実施群	824 (3.9**)	928 (-0.9)	480 (-3.1**)	97 (-4.5**)
「継続参加に自信がない」	$\chi^2=111.42^{**}$			
実施群	124 (-5.0**)	329 (-4.7**)	314 (4.0**)	146 (8.6**)
非実施群	494 (5.0**)	1051 (4.7**)	634 (-4.0**)	148 (-8.6**)
「学業妨げへの恐れ」	$\chi^2=22.96^{**}$			
実施群	166 (-2.2*)	300 (-2.2*)	341 (1.9)	109 (3.9**)
非実施群	505 (2.2*)	861 (2.2*)	788 (-1.9)	178 (-3.9**)
「経験不足で仲間に迷惑」	$\chi^2=23.75^{**}$			
実施群	113 (-2.9**)	348 (-2.1*)	365 (2.6**)	91 (3.2**)
非実施群	382 (2.9**)	980 (2.1*)	814 (-2.6**)	154 (-3.2**)
「人との接し方が苦手」	$\chi^2=41.79^{**}$			
実施群	97 (-2.7**)	270 (-3.7**)	362 (1.5)	186 (5.4**)
非実施群	327 (2.7**)	848 (3.7**)	853 (-1.5)	298 (-5.4**)
「魅力ある活動がない」	$\chi^2=172.62^{**}$			
実施群	56 (-6.5**)	238 (-6.3**)	414 (3.1**)	207 (10.9**)
非実施群	333 (6.5**)	880 (6.3**)	917 (-3.1**)	199 (-10.9**)
「他に熱中する活動がある」	$\chi^2=8.29^*$			
実施群	113 (-1.3)	254 (-1.5)	364 (0.4)	185 (2.5*)
非実施群	328 (1.3)	707 (1.5)	905 (-0.4)	384 (-2.5*)
「しつこく勧誘される」	$\chi^2=98.57^{**}$			
実施群	72 (-4.8**)	215 (-4.4**)	376 (0.4)	251 (8.8**)
非実施群	328 (4.8**)	730 (4.4**)	938 (-0.4)	331 (-8.8**)
「活動に価値見出せず」	$\chi^2=109.96^{**}$			
実施群	29 (-4.1**)	104 (-6.7**)	434 (-0.6)	346 (8.8**)
非実施群	162 (4.1**)	503 (6.7**)	1132 (0.6)	525 (-8.8**)
「周りからの偽善視」	$\chi^2=61.49^{**}$			
実施群	34 (-0.6)	101 (-5.0**)	392 (-3.0**)	389 (7.3**)
非実施群	97 (0.6)	423 (5.0**)	1129 (3.0**)	677 (7.3**)

() 内は残差 *p<.05, **p<.01

思う」の両段階に非実施群が増え、「全くそう思わない」の段階に実施群が増えていることがわかった。

項目「経験不足で仲間に迷惑」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=23.75, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」と「まあまあそう思う」の両段階に非実施群が増え、「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」の両段階に実施群が増えていることがわかった。

項目「人との接し方が苦手」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=41.79, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」と「まあまあそう思う」の両段階に非実施群が増え、「全くそう思わない」の段階に実施群が増えていることがわかった。

項目「魅力ある活動がない」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=172.62, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」と「まあまあそう思う」の両段階に非実施群が増え、「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」の両段階に実施群が増えていることがわかった。

項目「他に熱中する活動がある」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=8.29, p<.05$)。そこで残差分析をおこない、「全くそう思わない」の段階において実施群が増えていることがわかった。

項目「しつこく勧誘される」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=98.57, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」と「まあまあそう思う」の両段階に非実施群が増え、「全くそう思わない」の段階に実施群が増えていることがわかった。

項目「活動に価値見出せず」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=109.96, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」と「まあまあそう思う」の両段階に非実施群が増え、「全くそう思わない」の段階に実施群が増えていることがわかった。

項目「周りからの偽善視」は、 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(3)=61.49, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「まあまあそう思う」と「あまりそう思わない」の両段階に非実施群が増え、「全くそう思わない」の段階に実施群が増えていることがわかった。

②地域的要因との関連

居住地域への親しみ

表8は、現在住んでいる地域への5段階の親しみ度別に実施群と非実施群の人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(4)=34.54, p<.01$)。そこで残差分析をおこない、「大いに感じている」の段階に実施群が増え、「まあまあ感じている」と「どちらともいえない」の両段階に非実施群が増えることがわかった。また表9は、現在住んでいる地域に今後とも住み続けたいと思うかという質問5段階別に実施群と非実施群の人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、人数の偏りに有意差が認められた($\chi^2(4)=11.49, p<.05$)。そこで残差分析をおこない、「大いにそう思う」の段階に実施群が増え、「どちらともいえない」の段階に非実施群が増えることがわかった。なお、現在の通学場所と実施群、非実施群との関連に有意差は認められなかった。

表8 実施群・非実施群と地域への親しみ度との関連

	大いに 感じている	まあまあ 感じている	どちら ともいえない	あまり 感じていない	全く 感じていない
「現在住んでいる地域に親しみを感じる」	$\chi^2=34.52^{**}$				
実施群	345 (5.9 ^{**})	319 (-2.3 [*])	144 (-2.8 ^{**})	67 (-1.7)	51 (0.5)
非実施群	640 (-5.9 ^{**})	910 (2.3 [*])	463 (2.8 ^{**})	214 (1.7)	119 (0.1)

表9 実施群・非実施群と今後も住み続けたい度との関連

	大いに そう思う	まあまあ そう思う	どちら ともいえない	あまり そう思わない	全く そう思わない
「今後も住み続けたい」	$\chi^2=11.49^*$				
実施群	264 (2.8 ^{**})	304 (0.4)	183 (-2.4 [*])	99 (-1.2)	78 (-0.1)
非実施群	559 (-2.8 ^{**})	751 (0.4)	544 (2.4 [*])	285 (1.2)	199 (0.1)

()内は残差 * $p<.05$, ** $p<.01$

表10 実施群・非実施群と過去の地域活動参加との関連

	参加経験あり	経験なし	χ^2 値
実施群	824	106	$\chi^2=610.45$
非実施群	961	1387	

地域活動における過去の快・不快体験

図7は、過去の地域活動参加者1,827名(55.7%)における快・不快体験を各項目4段階で質問したものである。そして、快体験の項目には肯定的な回答が過半数を占め、不快体験の項目には「自分の考えや意見をうまく伝えることができなかった」の肯定的な回答が40%弱を占めたのを除くと、他の項目は否定的な回答が80%を上回った。なお、表10は、過去の地域活動における参加・不参加別に、実施群と非実施群の人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意である($\chi^2(1)=610.45$, $p<.01$)。従って、実施群には過去において地域活動に参加した者が多いことがわかった。

4. 考察

まず、過去1年間の地域活動への参加状況の結果をみると、本学学部生は、同世代の女性と比べて高い割合で参加していることがわかる^(注1)。そして、参加のきっかけとなった理由に「自発的な個人の意思」とともに「学校で参加の機会を与えられて」が多いことから、2002年の中央教育審議会の提言が現場の学校教育のなかにも浸透してきた証であると推測される。また、学生の地域活動参加における取り組みは、「当日に割り当てられた仕事に従事した」が最も高い回答率を示したが、「主催者側と情報を共有しながら」、「企画・運営に直接参加した」、「活動に対して積極的に意見を述べた」を合計すると52%に達しており、ロジャー・ハートの参画理論^(注2)における参画段階で臨み、かなり主体的に活動していた様子が窺える。さらに、2000年経済企画庁国民生活局「国民生活選好調査」による活動種目では、自然・環境保護、社会福祉への希望割合が高いとあったが、本学学部生の特徴は幼児や児童に対する奉仕活動・教育支援活動に多く参加しており、この傾向は、参加してみたい地域活動の種目に更に顕著に現れた。このような結果を得た理由として、本調査の過半数が教職を志す児童学科生で占められていることを考えると、むしろ当然のことと思われる。

次に、1年間の活動実施と個人的要因との関連について考察してみる。大学生活の満足度における項目「授業や課題におわれ、生活にゆとりがない」や、地域活動への参加を妨げる要素としての項目「学業が忙しく、時間的ゆとり

がない」では、地域活動実施との関連がみられなかった。これは、ボランティア活動の妨げ要因として時間的制約をあげた2000年の「国民生活選好調査」とはかなり異なる結果を得た。そしてこの結果と、本調査の地域活動実施者に部活動所属者や必修以外の単位取得者が多いことや、アルバイトをしている者に多い傾向がみられるなどをあわせて考慮すると、本学部生はある程度時間を犠牲にしても地域活動に参加する意義を見出しているものと推測される。

「大学生活における満足度」は、有意差の認められた9項目中7項目が「大いにそう思う」の段階に実施群の割合が増えていた。一部の項目には非実施群だけに限って関連が見られたり、「まあまあそう思う」の段階に実施群の割合が増えていたことが見られたが、各項目の結果を総合的に判断すると本調査における地域活動実施者は、大学生活を満足している傾向が強いということが明らかにされた。

「自身にあてる影響」は、地域活動への参加によってどのような結果が得られるか、活動の有効性に対するイメージを調べたものである。そしてこの結果、どの項目も70~80%を超える肯定的回答が得られ、本学学部生の地域活動への参加意識は、豊かな人的交流、仲間との絆を深める場として捉え、地域社会への貢献を果たしつつ、自己の成長を促すことが可能な場として有効であると期待していることがわかった。また、この地域活動への参加意識は、植村(1998)の調査「ボランティア活動への参加—非参加を規定する態度要因」における親和志向、社会貢献、自己向上志向を含めた複数の要因と関連していることも明らかになった。なお、実施群と非実施群との比較において全9項目に有意差が認められ、「大いにそう思う」の段階に実施群が増えていることから地域活動実施者は、より強くその有効性を実感しながら活動に参加していたと考えることができる。

「地域的要因」については、居住地域への親しみとして現在住んでいる地域への親しみ度と今後も住み続けたい度合いをみたところ、双方とも「大いにそう思う」の段階に実施群が増えていた。そしてその結果、地域活動実施者は居住地域に強く愛着を感じていることがわかり、この点も植村の調査結果と一致した。また、地域活動における過去の快・不快体験の結果からは、「自分の考えや意見をうまく伝えることができなかった」の項目に40%程度の不満が見られたが、ほかの快体験項目は80%、不快体験の項目は20%の回答率を得ていることから、過去に体験した地域活動におおた満足していたことがわかった。さらに、過去に地域活動に参加した者の約半数がこの1年間の実施者となっていることは、過去に経験のない者と比較すると実施

率において6.5倍の開きがあり、過去における満足な地域活動の体験がいかに重要であるかをもの語っている。そしてこれは、杉原らの「運動・スポーツの阻害要因に関する調査」(1995)における『スポーツ参加においてフロー経験を感じた者は、後のライフステージにおける継続的なスポーツ実施につながる』とする仮説⁴⁾と一致した。

最後に、今後地域活動を発展させるための条件について、「地域活動への参加を促進する要素・妨げる要素」を中心に考察していく。まず、活動を促進するために実施者は、「時間割への配慮」、「活動への評価」、「必修授業としての扱い」などの対策を大学側に強く期待している。また、受け入れ体制側についても「気軽に参加できる雰囲気」、「情報の充実」、「地域・まちづくりとの協力」を求めている。一方、活動を妨げる要素として非実施者は、「時間調整の困難さ」、「学業妨げへの不安」、「精神的ゆとりのなさ」や、「仲間に迷惑」、「人との接し方が苦手」、「継続して参加する自信がない」など、個人的な性格や能力を問題視している。従って、地域との連帯感を高め、自己の成長を促すことが期待される有意義な地域活動への参加をより盛んにするためには、これら実施者の意見を取り入れたり、非実施者の不安を取り除くような積極的な対応策を総合的に検討する必要があると思われる。

5. まとめ

本研究の目的は、本学学部生の地域活動参加における意識を個人的要因、および地域的要因の観点から捉え、実施者と非実施者を比較し、各要因との関連を統計的に明らかにしようとするものであった。その結果、次のことが明らかになった。

- 1) 本学学部生の1年間の地域活動への参加状況を見ると、実施者が28.3%と高い割合を示した。そして、参加した活動種目の特徴として、幼児や児童にたいする奉仕活動・教育支援活動が多く見られ、参画の度合いも高く、主体的に活動に従事していた。
- 2) 個人的要因における実施者と非実施者の比較では、「時間的要因」については関連がみられなかった。しかし、「大学生活における満足度」や「自身に与える影響」については関連がみられ、実施者が肯定的に評価していた。
- 3) 地域的要因における比較では実施者に、「現在住んでいる地域の親しみ度」、および「今後も住み続けたい度合い」が大きいことがわかった。また、「地域活動における過去の快・不快体験」に関しては、これら過去の参加経験が地域活動実施に対して大きな影響を及ぼし

ていることが明らかになった。

- 4) 今後の地域活動活性化に向けて実施者のみならず、潜在的参加希望者に対しても、活動の妨げになっている要因を改善していくために、送り出す大学側や受け入れる地域側の両者が協力して取り組む必要があることがわかった。

謝辞

本調査の実施にあたり学期末の大変ご多忙のなか、164クラスの担任の先生方、ならびに3,371名の学生の皆さんにご協力いただき、厚く御礼を申し上げます。また、聖徳大学人文学部長、佐藤三郎先生には研究の手順や考察において、適切なアドバイスを頂戴いたし、心より感謝申し上げます。

注

- 1) 総務庁統計局(1998)「社会生活基本調査報告」では、社会奉仕活動と社会参加活動を含めて社会的活動と捉え、女性の行動率を15～19歳は20.0%、20～24歳は14.7%と表している。
- 2) ロジャー・ハートの子どもの参画理論では、操り参画、お飾り参画、形だけの参画を非参画とし、意思表示、情報の共有、主体的取り組みの参画とは区別している。

引用文献

- 1) 青少年問題審議会(1979)「青少年と社会参加にいて」、意見具申
- 2) 青少年問題審議会(1986)「21世紀に向けての青少年の健全育成の在り方」、意見具申
- 3) 中央教育審議会(2002)「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」、答申
- 4) 杉原隆ほか(1995)「運動・スポーツの阻害要因に関する調査報告書」(財)健康・体力づくり事業財団

参考文献

- 植村勝彦(1998)「ボランティア活動への参加—非参加を規定する態度要因」コミュニティ心理学研究, 1998, 2巻1号, pp. 2-12
- 小澤亘 編著(2001)「ボランティアの文化社会学」世界思想社教育アンケート調査年鑑(1996)「高校生の社会福祉とボランティア活動参加への意識調査」糸満市社会福祉協議会, 1996, 上巻, pp. 943-954
- 「中学・高校生のボランティア意識調査」(財)日本青少年研究所 1996, 上巻, pp. 929-942
- 「大都市青少年の生活・価値観に関する調査」東京都生活文化局, 1996, 上巻, pp. 141-222
- 「第2回横浜市青少年基本調査」横浜市市民局青少年部, 1996, 上巻, pp. 223-244
- 経済企画庁編(2002)「国民生活白書(平成12年度版)」
- 経済企画庁国民生活局編(2003)「平成12年度国民生活選好度調査」
- 佐藤徹ほか共著(2005)「新説市民参加—その理論と実際」公人社柴野昌山(1990)「現代の青少年—自立とネットワークの技法」学文社
- 高橋勇悦監修(1995)「都市青年の意識と行動」恒星社厚生閣
- 内閣府政策統括官編(2001)「日本の青少年の生活意識(第2回調査)」
- ボランティア白書2005編集委員会(2005)「ボランティア白書

2005—ボランティアのシチズンシップ再考—

池田幸也「参加する人々を育成するために」pp. 70-76

坂東久美子「教育におけるボランティア活動の推進」pp. 77-83

西川正「公共の市民によるマネジメントの現状と展望」pp. 135-

142

村上徹也「ボランティアのシチズンシップを再考する」pp. 9-20
文部科学省初等中等教育局(2003)「体験活動事例集—豊かな体験活動の推進のために—」ぎょうせい